

志摩の島々のいま

間崎島篇まざきじま

三木 剛志

前号の渡鹿野島篇につづき、志摩市のもう一つの離島、真珠養殖発祥の地として名高い英虞湾のほぼ中央に位置する間崎島の現状について報告する。

戦後、真珠養殖の一大拠点として一躍名を馳せた島だが、近年、住民の生活支援と観光面で新たな動きが生まれてきており、今回はそれぞれ活動されている方々からお話をうかがった。前号グラビアもあわせて参照いただきたい（現状は令和四年七月の取材時）。

住民・市社協・イオンが連携して運営する「もやい」ショップ

七月下旬の金曜日、朝九時前。近鉄賢島駅南側にある雁木状の船着き場に

間崎島住民の山本幸保さん（六四歳）の姿があった。イオン管理センターと書かれた商品ケースをはじめ、発泡スチロールやダンボールの箱を山本さんの船外機付きの小船に積み込み、島に運ぶのである。そこに調整役を担う志摩市社会福祉協議会（市社協）の青木裕貴さんが合流した。

商品を載せた船は、真珠とカキの養殖筏や釣り筏の浮かぶ穏やかな英虞湾を進み、一〇分少々で間崎島の集落北側にある入り江の浮き桟橋に到着。ここで山本さんと青木さんは自治会が所有する軽トラックに商品を積み替え、平成一七年度末に閉校した小学校（和具小学校間崎分校）跡に建つ間崎島いき

いきセンターの「もやい」へと運ぶ。

間崎島では平成二七年、市社協が住民主体の拠点運営を目指す生活支援拠点「もやい」を設置。その支援メニューの一つとして、市社協の障がい福祉事業所と住民が協力しながら、保存の効く食料品や日用品などを平日のみ販売していた。

しかし、同事業所の利用者減少もあり、同年度末に運営を縮小。間崎島では民間商店も同二八年に閉店しており、買い物が大きな課題となっていたことから、本土側の協力員と市社協が協力し、週一回、住民へ受注販売をおこなうながら買い物支援を継続した。同三〇年一一月頃から、イオン阿児店あごと住民と協議を重ね、令和元年八月、同店と住民有志（地域支援員）が協働して運営し、同店の出張店に準ずる「もやいいきいきショップ」がオープンした。「もやい」とは、地元の言葉で「皆と一緒に漁をする」という意味があり、助



商品の運搬を担う山本幸保さん。



もやいショップにて。

け合いの願いが込められている。毎週月・水・金の三日間、午前九時から一時半の間のみ営業。月・水は二人、金曜は三人で販売を担う。この日は責任者の山本くに枝さんのほかに、山本喜代美さんと山本初代さんが手伝う。

月曜と水曜は陳列品の販売のみ。金曜は注文品の受け取り日となっている。搬入された商品を販売スタッフが陳列品と注文品に大別し、後者を注文者別に仕分ける。土用の丑の日が間近だか

らか、蒲焼きウナギのバックが目を惹く。

開店後、島の方々が注文品を受け取りに順次来店、同時に来週分の注文をする（月曜にも追加注文は可能）。今日は市社協の青木さんと奥山光さんが、前週の履歴も参考にしながら注文書の記入を手伝う。普段の注文品は、牛乳や納豆、卵、ヨーグルト、野菜類などが多いという。注文品の利用世帯は、開店当初は二〇軒ほどだったが、徐々に減

少し、いまは一五、六軒となっている。イオン阿児店でCS 同友店販促課長を務める郷昇さん（六〇歳）は、在庫管理のため毎週金曜日に来島、陳列品の補充をおこなう。

「注文品は、商品の実物が見られないので、島の方から話を聞きつつ商品名などをアドバイスすることもある」

店内の棚に陳列されている商品は、加工品やカップ麺など常温で保存が効くものと、トイレットペーパーや洗剤

などの日用雑貨が中心。阿児店と同じ価格設定がなされている。阿児店の節目にあたる「周年祭」では、「もやい」でも一緒に商品を安く還元。七月末には「もやい」の開店三周年記念で、しようにや砂糖、人気の菓子類などの特別商品を安く販売する。



山本くに枝さん(中央)ほか、「もやい」の運営に関わる皆さん。

注文品を受け取って現金精算し、翌週分の注文を済ませた方々は、マイバッグやカゴに移し替えた品物を自転車や手押し車に積み、めいめい自宅へと戻っていく。どうしても店に来られない人には配達することもある。

最盛期には六〇〇以上の人口を数えた間崎島も、いまの実人口は四〇人ほどで、高齢化率は八〇パーセントを超える。山本幸保さんによれば、住所は島に置いたまま本土側の神明や鶴方に住居を構えて、真珠養殖などのために島に通う人たちもいるという。

「周りがどんどん近代化するなかで、この島だけは昔のままの状態。きれいなビーチなどもあり、まさに『夢の島』ですよ。何とかこの島を残したいんですけど、草引きの作業などでもいまは、もうええわいいう感じになってきている。どうしたらええんやろね……」

島の自然を体感できるオーベルジュ

島を東西にはしる市道を東進し、北側の海に向かって急な斜面を下ると、数台の重機が稼働する建設現場に出た。かつて、複雑なリアス式海岸の岬に間崎島唯一の宿泊施設となっていた美城という料理旅館が建っていた場所である。いま、堀勇一さん(五三歳)が会員制のオーベルジュ(宿泊施設を備えたレストラン)「MOKU ISESHIMA」を建設中で、宿泊棟が完成に近づいている状態だ。

堀さんは神奈川県茅ヶ崎市の出身で、寿司職人を目指して東京で修行、平成二二年に地元に戻って「鮪裕」を開業した。五年ほどたって、ネタとして扱う魚に対する疑問が芽生えはじめた。たとえば、クロマグロは大型巻き網船が幼魚と産卵親魚も構わず獲ってしまうこともある。そのような食材を使っているのか。沿岸漁業の一本釣りの魚などが高く売れるような世の中にしたいの思いが募ったという。

「それまでは魚市場からしか流れが見



自ら漁も営む堀勇一さん。

えていなかった。食材の旬も大切にしたいし」

堀さんは平成二九年に初めて間崎島を訪ね、こちらで店やったらお客さんがよろこぶだろうと思った。

「この自然は素晴らしい。とくに夕方から朝にかけて、夕景、星空、鳥の声がいい。それは泊まらないとわからないね」

しばらくして美城が閉業することとなり、縁あってその土地を入手。茅ヶ

崎の店を長男に任せ、令和元年、一日一組限定、カウンター六席のみの寿司店「鮎裕^{ぜん}禅」を開店した（取材時には一時閉店中だったが、同四年一月「SUSHI YUTAKAZEN」としてリニューアルオープン）。

ヘリポートを併設した「鮎裕禅」の顧客は、東京のIT起業家など、経済的に余裕のある三、四十歳代が多かったという。ヘリコプターは提携する会社が運航、東京からだと片道約一時間半、費用は二、四人くらいで往復約一〇〇万円を超える。

本土側から店の棧橋へ、船で直接送迎もしていた。リピーターも多く、宿泊は英虞湾に面した本土側の高級リゾートがよく利用されていたという。ここで温泉を掘削する話もあったが、中世以来の湯治場で『枕草子』に三名泉の一つとして記された

名湯・榊原温泉（津市）にヘリなら一五分で飛べる。

「コロナ禍で、ハワイなどの代わりにこちらに眼が向いたのでは」

季節ごとに魚はちがう。アジやタイ、ヒラメ、スズキ、カツオに加え、秋はサワラやカマス、冬はフグ、ヒラメ、クエなど。懇意にしている海女さんからイセエビやアワビを入手。米をはじめ醤油、酢、ワサビ、果物類など食材は県内産を使用。飲み物も地酒や地ビールなどを揃えていたという。

令和二年には、間崎島で真珠養殖を営む岩城由紀雄さん（後述）からの推薦があり、三重外湾漁協和具支部の準組合員になった。一本釣りでのアジ、引き釣りでのイカ、カゴ漁でのワタリガニなど、自分で使う分だけ獲っていた。建設中の宿は、一棟貸しで一日一組限定の「YADO TERASU」となる（令和四年一月オープン）。旅館だった既存の建物をリフォームする案もあったが、



オーベルジュ「MOKU ISESHIMA」の完成図(MOKU ISESHIMA提供)。

離れ島にお客さんを多く集めるのは難しい。そこで、更地にして建て替え、高単価の客層に絞る形にした。受け入れは最大八人までで、料金は一泊で五〇〇一〇〇万円程度。食事は、夜は寿司、朝は和食を提供。連泊の方には、昼はバーベキューなどを考えている。

内風呂と露天風呂、別棟のサウナ、宿泊棟の前にはプール、奥にヘリポート。丘の上には寿司店。ヘリコプターのバイロットなどの宿泊用と、従業員寮が一緒になった建物が別にある。

養殖作業小屋などが残る、海を挟んで向かいに伸びる岬(間崎島の一部、約二〇〇〇坪)の土地も取得した。第二ヘリポートの整備を予定しているという。ちょうど、伊勢市にある県立宇治山田商業高校で商業の授業を受け持つ佐々木崇教諭らに引率された三年生たち(男子二人、女子六人)が、課題研究「伊勢志摩の観光とビジネス」講座の材料探しに来島しており、堀さんの話に耳を傾けている。「空飛ぶクルマ」「SDGs 修学旅行」の両部門で、高校生の観光事業構想コンテスト「観光甲子園」に応募するのだという「※」。六月には、「空飛ぶクルマ」に関して、ヘリコプターなどを使った事業の現状について堀さんがこの高校生たちに講演を

している。

※同校は「空飛ぶクルマ」部門で決勝へ進出。

環境意識の向上を目指すキャンプ場

建設中のオーベルジュエリアから岬を回り込んだ入り江の一角に、一日一組限定の「離島キャンプ&サウナ」はある。

もともと真珠養殖の作業場で、木造瓦葺きの空き家などが残るのみの場所だ。三〇年間ほど無人だった土地を堀さんが借り、令和三年の七月にオープンさせた。テントをはじめSUPやカヤック、釣り具などの貸し出しもしており、手づくりのサウナを備える。利用料金は一泊四人までで一万七〇〇〇円とリーズナブルだ。

「どうやって過ごすか、お客さん自身に考えてもらう」という上級者向けキャンプ場のコンセプトは堀さんがつくった。

「ひとこと言えばエコキャンプ。戦

後初の指定を受けた伊勢志摩国立公園の特長は、人の営みと自然との調和。ここの経験が、海ごみなどの環境問題、建造物の持続可能性を考えるきっかけになれば。廃墟の片付けをしたら無料で利用してもらったりもしている」

運営は、息子の堀望さん（二四歳）が担当。茅ヶ崎市出身で、大学を卒業してすぐこちらに来了。間崎島とは別に、日帰りデイキャンプ場を開設している本土側の神明に駐車場と棧橋があり、そこから利用者を船で送迎している。

予約はネットからで、愛知県内を筆頭に、県内の四日市や津、大阪からの利用者が多く、年齢層は四、五十歳代、リピーターも増えている。利用者に満足した点を聞くと、もつとも多いのは「静かさ」だと望さんはいう。

「英虞湾の環境や間崎島のことをもつと知ってほしい。空き家問題を認識してもらうこともあり、廃墟の姿もあえて残している」

大阪ECO動物海洋専門学校（大阪市西区）と提携し、放置漁具の回収やガソリンガゼの駆除など、海をきれいにする活動も継続している。

望さんは、いまのところ間崎島の方々との付き合いは限られているが、今後は島内の土地を借りて飲食店を経営してみたい、という。

戦後から続く間崎島の真珠養殖

宇治山田商業高校生たちも同乗した堀勇一さんの船で、岩城由紀雄さん（五八歳）の真珠養殖場へ向かう。

真円真珠養殖発祥の地である英虞湾の真珠養殖の歴史は、間崎島と賢島との間にある小島、いまは無人の多徳島（たどく）に始まる。明治時代、鳥羽出身の御木本幸吉がこの島に研究施設を置き、養殖技術の基礎を築いた。間崎島の真珠養殖は戦後からで、昭和三十年代がピークだった。

高校生たちと一緒に、岩城さんから

お話をうかがい、玉入れの工程を見せもらう。

「最盛期には島のほぼ全戸が真珠養殖に携わっていたが、いまは個人事業の七軒のみに。以前この事業所の雇われだった父が、施設を買って自営していた。自分は二代目として、高校を出て一九歳の時からずっとやっている」

真珠の母貝となるアコヤ貝は、人工採苗されたものを業者から買って育てる。

「玉入れ前には、貝を入れた容器内の海水の入れ替わりを少なくなるようにして、貝の活動を一旦止める。それでも活動を続ける強い貝には、塩化マグネシウム溶液に漬けて麻酔をかける。そうすると貝の口が開きやすくなり、身持ちも良くなる」

玉入れは、まず篋で二枚貝の口を開き、生殖巣をメスで切り開く。そこに、挿入具を使ってドブ貝などを加工した



岩城さんの作業を見学する宇治山田商業高校の生徒たち。

球状の核と、真珠層（貝殻成分）を分泌する外套膜の小切片（ピース）を一緒に移植する。熟練を要する繊細な作業である。

「外科手術でお腹の中に異物を入れられたアコヤ貝は、それを馴染ませるために外套膜から分泌物を出して核をき

れいに巻いてくる。それが真珠になる」

アコヤ貝の内側はきれいな干涉縞の光沢となっているが、それも外套膜から分泌された真珠層だ。

玉入れは、六月から盆前まで。玉入れ後は養生のため船などがあまり通らない穏やかな海域に動かす。アコヤ貝の胎内で真珠が十分成長した一二月、玉出しをする。

玉は志摩市の立神^{たてがみ}真珠養殖漁協（平成二六年に間崎真珠養殖漁協を吸収合併）に出荷。かつては年に八、九万個ほど出していたが、いまは二万個程度だという。

アコヤ真珠のサイズは一〇ミリが限界。二、三ミリから一〇ミリまでのものが入札に供される。なかには一匁^{もんめ}（三・七五グラム）二万円超の玉もあるが、全体のなかで一級品は一、二割程度。ここ一、二年は新型コロナウイルスの影響が大きく、加工販売業者による海外の商談会も不調だったという。

「入札値がもう少し上がれば、後継者

も出てくるのですが」

アコヤ貝の貝殻は、ボタンの加工原料として中国に輸出していたこともある。貝柱は食材になるため、養殖しようかという話もあったという。

岩城さんは、冬期はアオサノリの養殖も営む。九月に南伊勢で網に種付けをし、洋上にしばらくおいてこちらに運び、四月にかけて養殖と収穫。いま、間崎島でアオサ養殖を手掛けるのは二軒のみで、岩城さんの養殖の規模は六〇〇枚（一枚二キログラム強）程度、製品は三重外湾漁協を通して市場へ出している。実入りは真珠より少し多いという。問題は、アコヤ稚貝の斃^{へい}死だ。平成八年頃からその大量死が全国で問題化し、岩城さんは若手の頃から間崎島の真珠研究会のメンバーとして調査などをつづけてきた。二、三年前、英虞湾全域に新種のウイルスが入ってきたのだという。

「二週間前まではちゃんと生きていた



アオサノリ養殖も手がける岩城由紀雄さん。

のに、いま残っているのはごくわずか。今年の玉入れで使う予定だった、去年三月に人工孵化した貝も減っている。早く何らかの対策を講じてほしいのですが……」

国の諸施策の積極的な活用を

今回は、内海の湾内に位置する志摩の小さな島々の実情を見聞し、前号の渡鹿野島篇では自治会の方々をはじめ観光関連事業者、地域おこし協力隊員

など、かつての負のイメージを払拭し、健全な観光立島に向けて奮闘する方々の取り組みについて報告した。

間崎島の買い物など離島住民の生活対策は、いまや全国の小規模離島共通の課題である。住民有志の方々をはじめ、小売事業者などを含めた仕組みづくりと運営への適切な支援がなされれば、本土側と比べて高額な支出を強いられがちな離島の物価低廉化対策としても有効だ。

本土至近に位置する内海離島の傾向として、とくに若い世代が島を離れて本土側に住み、島へは通勤や、仕事場として利用する傾向が高まる一方、島の環境にほかにない高い価値と可能性を見出す方々もいる。本土側

との連携と交流が図りやすいという地理的条件を活かし、環境や社会問題などについて考え、新たな発想を促す教育・実践の場としても活用したい。

間崎島では、令和四年一〇月、志摩市が主催し、島の振興と定期航路の利活用も兼ね、「みえ出逢いサポートセンター」の協力を得て婚活支援イベント「しま恋」が開催された。県内外の女性と県内在住の男性各八人が参加し、島の方々も温かく見守る中、四組のカップルが誕生したという。次回は二月に「ハートアイランド」のイメージで情報を発信している渡鹿野島での開催が予定されている。

両島とも、いまなお交通便利性の高い島々である。今後、改正離島振興法にもとづく小規模離島への生活支援をはじめとした諸施策も積極的に活用し、さらに活性化を図ってほしい。

（日本離島センター調査研究部長）

※写真はすべて小原佐和子